
SNOW IMAGE

アルシェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S N O W I M A G E

【Nコード】

N 6 2 6 2 0

【作者名】

アルシエ

【あらすじ】

雪のイメージ、彼女との約束、黄色いマフラー
ボクはただ、待っていただけだ

気だるげに見る外は、灰色と彩度の落ちた街。
降り続く雨は終わりをボクに連想させた。

「……どうせなら雪が降ればいいのに」
雪は彼女のイメージ。

空の寒さに負けたコーヒーは手元で頼りなく熱を放ち、冷めて張りを失ったアツプルパイは横たわって、高い窓を曇らせる。

アーケードを見下ろせるこの場所から、行きかう人の中に彼女の姿を探していた。有象無象の中に黄色いマフラーを探して。

「三年経った今日、この時間、またこの店で会おうよ。このマフラー巻いていくから」

十七になったばかりのレウは、カナダへ行ってしまうことをそこで僕に告げた。

もちろん突然のことに驚いたが、彼女は夢に向かってひたむきに走っている。ボクは反対なんてできない。ただそつと、「いつてこい」と言葉をかけた。

今になってボクはその時に、「待つてやる」と言えなかったことを後悔している。けれど、その時のボクにレウを繋ぎとめておける自信などなかった。

ただ怖かった。その言葉がどうボクらに影響するのかが。

暖房の行き届いた店内なのに、窓から伝わる冷ややかな空気が気になった。

弾んだ人の声の中でのいるボクは、この場所において異端なのではないかと、静かに息を吐く。

レウが旅立った日から、ボクは何通かのメールを送り、何度か電話でレウと言葉を交わした。

けれど、彼女からのメールは日毎に減り、電話も短い時間しか彼女は使えない。二年前からどちらも途絶えた。

レウは今自分のやりたいことを必死にやっている。ボク一人寂しく思ったからといって彼女に迷惑をかけるわけにはいかない。レウの時間は彼女自身のものなのだから。

メールを送っても返ってこない。電話をかけても出ない。でもそれはレウが今を精一杯生きているから。そう自分に言い聞かせて日々をすごした。

蒸気で白く曇された窓は闇色に染められて、時刻はもうすでに約束の時間を当に過ぎている。

雨はまだ止まない。けど、人は絶えることなく、寄り添うように歩いている。

ぎゅゅつと心臓を荒縄で縛られている感覚。その光景から目を逸らした。

無意識にカップに手が伸びる。あおった温い液体が不快にのどを滑り落ちる。

——まずい紅茶だ。

ため息についてカップを元に戻す。

レウがいなくなってから、ボクの生活は彩色を無くした。

学校での人付き合いも、

遊ぶことも、

学ぶことも、

笑うことも怒ることも悲しむことも楽しむことも、レウが隣にいてくれたからであって、

ボク一人ではどんな色もつけることができない。

いつしかボクの見ている何気ない景色は、窓の外の暗色と灰褐色と変わりなかった。

転がり落ちるボクは、壊れかけるココロを繋ぐため、

薬に依存した。

毎食四錠、寝る前に一包、不眠のためにもう一包。

人の話を聞く気のない医者に、ただ薬だけを処方してもらおう。

そしてボクは身体の異常と精神の異常を行ったり来たりしながら、マトモな人間の心を保ったまま今日を向かえた。

周りの笑い声が耳に障る。鼓膜にアイスピックでも突き刺したほうでした。

叫びそうだったボクの口を塞ぐために、フライドポテトを無理矢理詰め込む。

「ああ、くそつ。腹が立つ」

レウは約束の時間には来なかった。結局、ボクの独りよがりだったのかと、何度も自分の中の誰かに尋ねて。虚しく、ただ独りそこにいた。

ボクがレウに裏切られたとは思わない。ただ、選ばれなかっただけだと、そう思っていた。

「ホント、腹立つ」

言って向かいの席のハンバーガーを略奪。包みを解いてかぶりつく。

次、ポテト。次、紅茶。次、チキンナゲット。向かい側のトレイのファーストフードを奪っては食う。

「あの、ユウ……怒ってる？」

向かいからおびえた声が聞こえる。

「怒ってない」

ハンバーガーを平らげ、ポテトを食らいつくし、一つ残らずチキンナゲットを処分してから自分のアップルパイに取り掛かる。

「うう……やっぱり怒ってるじゃない。ってか、私の晩ごはん……」

マジ泣きしそうになっている彼女の、黄色いマフラーを見ているとまた腹が立ってきた。

「レウ、今度はチーズバーガーとポテト（Ｌ）とコーラ（Ｌ）とアップルパイ×３買ってこい。お前の金で」

「お、お願い勘弁してよ！ 本当にごめんってば。時間に遅れたこ

とも、メールも電話もできなかったことも謝るから！」

両手で拝み倒そうとするレウ。別に怒ってなどいない。

「ああ、それは違うぞ」

「えっ？」

「お前の顔見たら何故かそうしたくなった」

「ひ、ひどい！」

断じて怒ってなどいない。俺はただ、まともにレウと会話する方法がないだけだ。

「ねえ」

「ん？ おわっ！」

いつの間にかレウがボクの顔を覗き込んでいる。

あまりの顔の近さに思わず身を引いた。

「ユウ、私と会ってからずっと窓のほうばかり見てる。もう私の顔なんか見たくないの？」

「むっ……」

レウは真っ直ぐボクの目を見てくる。

それに耐えられなくてボクは目を逸らす。

「ほら、また」

「……いや、これは」

「？ これは、何？」

言えるわけではない。

待ち焦がれて、

遅れながらもやってきたお前を一目見て、

この三年の間に綺麗になったなんて、

こっ恥ずかしくて言えるわけがないだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6262o/>

SNOW IMAGE

2010年11月3日23時10分発行